

Title	小泉教授著 社会問題研究
Sub Title	
Author	加田, 忠臣
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.7 (1920. 7) ,p.1016(140)- 1022(146)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200701-0140">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200701-0140</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 新刊紹介

#### 小泉教授 社會問題研究

神山南神保町 岩波書店發行  
舊版四八〇頁定價三圓二十錢

社會問題を論ずる者の態度は之を大體二つに分つことを得る。即ち其の一は其の當時の社會問題に對して臨機應變的實際的解決方を工夫考案するものに専心するものと、其の第二は社會問題は抑も如何なる原因によつて來るか、其の根本的解決如何を純粹なる學問的見地に立つて論ずるものである。小泉教授の「社會問題研究」は第二の立場に立つて所謂社會問題の根本問題についての考察に關する論文を刊行したものであるから、もし人あつて、この書の中に所謂社會問題解決の實際的方策を求むるならば

その人は必ず失望を禁じ得ないであらう。けれども吾々が社會問題の據つて來る所の眞の原因社會問題解決の根本政策を暫らく、實務家的見地より脱却して、之を求めるならば「社會問題研究」は吾々に對して多大の暗示と豊富な思想とを提供するのである。

本書に收むる所の「諸篇は之を述作せる後、新しきは三月、古きも未だ三年を出でない」(本書序文) 著者の次の十篇の論文である。

- 一、フェルナナンド・ラッサルと獨逸労働者運動
- 二、集産主義及びサンガカリズムに對する批評としてのヤルド・ソーシャリズム
- 三、再論 Guild Socialism
- 四、労働の苦痛
- 五、二種のユートピア
- 六、學問藝術と社會主義
- 七、マルクスの價值論と價格論との關係
- 八、労働者の承認と國民工場の始末
- 九、トオマス・ホジスキンの労働果實全收權主張
- 十、戦費の經濟理論

この中フェルナナンド・ラッサルに關するものは單獨の論文として最も長く、二より六まではギルド・ソーシャリズムまたはギルド・ソーシャリズム關係の論文で、著者の立場はこゝで窺ふことが出来る。

フェルナナンド・ラッサルと獨逸労働運動者は Agiator (煽動家または労働運動者)としての彼の傳記、學說思想を最も精細に叙述せるものである。ラッサルが其の歴史的文書「公開答狀」において労働者問題の解決方策が労働者の生産組合組織にありとし、労働者が之を組織するのに彼は國家の援助を得べきであるとした。然らば如何にして國家を動かして此舉(労働者の自由團結を國家が援助すること)に出でしむ可きか。答へは明白である。普通直接選挙法の實現を措いて他に求める事が出来ない。「普通直接選挙は獨り諸君(労働者)の政治的根柢たるのみな

らず、亦同時に諸君の社會的根柢であり、一切社會的救済の根本條件である。是れ實に労働者階級の物質的境遇を改善する唯一の手段なのである。……成功の秘訣は一の瞬間に於て最重要の一點に全力を集中して左右を顧みないと云ふ事に存する。左右を顧みること普通直接選挙と稱するもの、外有ゆる聲に耳を塞ぎ、斯くして始めて諸君は其の目的に到達することが出来るであらう。(六五—六六頁)

ラッサルの「公開答狀」が公にせられてから既に六十年に垂れんとしてゐる。さうして當年の労働運動者が直接普通選挙に偉大なる感激を見出したのを考へて、更に現在の労働運動の傾向を見るときに、吾々はそこに絶大なる差異のあることを觀じない譯には行かない。無産者階級運動は急速の勢を以つて政治運動即ち議會政策から直接行動へと移つて行く。労働組合の確固

たる基礎なく、政治的に無産者階級の代表なき國において更に其甚だしいの感ぜざるを得ない。かゝるときに政治的社會主義運動の創始者とも云ふべきラッサルの生涯と其の思想について知ることは、政治行動論者は勿論のこと、直接行動論者も其の政治行動主義を研究することによつて多大な教訓を得ると思ふ。殊に、先年社會主義者某氏によつて著はされたラッサル傳以外に纏つたもの、ない時に斯くの如き詳細に渉る研究が本書に收められたのは甚だ喜ぶべきことである。

「集産主義及びサンデカリズムに對する批評」としてのギルド・ソシヤリズムは實に日本においてギルド社會主義を紹介した最初の文獻である。大正八年の下半期においてギルド社會主義の思想は吾が評論界に急激な勢を以つて其の地位を得て來た。この論文はそれより既に二年前、

大正六年五月、六月の「國家學會雜誌」に公にされたものである。當時日本の學界はギルド社會主義について小泉教授以外に何等言ふ人がなかつた。ギルド社會主義流行の今日多少今昔の感なきを得ない。「再論 Guild Socialism」は「舊作(集産主義云々)の公にせられて以來世に現はれたギルド・ソシヤリズム主張の書籍數冊を參考して些か前日の論の足らざる點を補ふ意味で草されたものである。」(一六七頁)勿論この二論文はギルド社會主義に關する邦文の文獻のオーソリテイたることは疑ひのない所である。

教授はギルド社會主義は「如何に古くても千九百六年より古いことはあり得ない運動である更に今少し進んで云へばギルド・ソシヤリズムは凡そ千九百十一年以後の運動だといつても差支ないかと思ふ。」(一二四頁)とし、ギルド・ソシヤリズムは千九百十二年頃雜誌「New Age」紙

上で唱へ出されたとせられてゐるとした。(一六九頁)これに對して室伏高信氏は「小泉君はギルド社會主義の起源についてそれが一九一二年頃から New Age で唱へ出されたように述べてゐるが、ホブソンに従へば既に一九〇六年からであり、またオレトヂが最初にギルド社會主義を提唱したのは New Age においてもはなくして Contemporary Review におゝてである。」としておられる。(「改造」四月號四二頁)之に對して小泉教授は五月、六月の「改造」において室伏氏に答へられた。私の見る所を以つてすれば小泉教授の言はるゝ所は運動としてのギルド社會主義であり、室伏氏の主張する所はギルド社會主義の文獻に關することである。即ち運動としてのギルド・ソシヤリズムは千九百十年一十一年の勞働不安を背景にしてサンデカリズムと集産主義とに對する批評から生れたものである。(一五

四頁)然しギルド社會主義の思想の淵源は S. G. Hobson が其の National Guilds の序文に記載する所によれば千九百〇六年におけるオレトヂの論文とペンティの著書 Restoration of Guild System であり、千九百〇六年から十二年までの New Age における論文であると云ふのである。而して室伏氏の言はるゝ所はギルド主義の思想の淵源に關することである。だからこの點に關する兩氏の主張は共に正しいのである。たゞ其の相異は見方の相異だけである。教授は運動としてはオレトヂ、ペンティの著書論文を Negligible なものであるとし、室伏氏は文獻的に之に注意したのである。

次に私は著者の立場について考察して見たいと思ふ。私は「改造」の一月號で小泉教授を評して「生産者としての人間を重視して社會組織の改造を企てなければならぬと主張する様に思は

れる」と言つた。今この「社會問題研究」を通讀して得た所感も亦これと一致する。「勞働の苦痛」二種のユートピアは其のよき證左である。私は其の當時教授がギルド・ソシヤリズムに行くと考へてゐた。けれどもこの點は無條件に斷定することは出来ないのである。例へばコールは社會問題の根本問題は貧窮ではなく、隷屬であると主張した。この見解に對して教授は無條件に承服してはゐないのである。教授は勞働者の勞働の不愉快な原因を勞働時間の過長、分業及び賃銀制度を擧げた後に次の様に云つてゐる。「勞働を不快にする原因は之で盡きて居るのではない。此外にまだ最後の重大な一原因が残つてゐる。それは貧窮である。」「勿論今日の勞働者の多數は長時間の作業のために生理上耐へ得る極度(以上)の疲勞を感じてゐる事は事實である。併し勞働者の感ずる苦痛はこの事實上の疲

勞許りではない。止め度い勞働を止める事が出来ぬと云ふ狂屈、被拘束の感が勞働の不快を一層甚だしくするのである。止めたい勞働を何故止める事が出来ぬか。答へて曰く生計上の必要が切迫して居るからである。従つてこの生計上の顧慮を忘れさせる事が出来ない限り、勞働の苦痛の一要素たる被拘束の意識は遂に之を除くことが出来ない。そこで勞働の快樂を要求し、生産上の幸福を高唱するものも亦先づ生存保障の必要を認める理由が生ずるのである。」「(二六九—二七二頁)即ちギルド・マンが「貧窮は徴候に過ぎぬ。病患は隷屬である。」「(産業自治論新版三五頁)と云つて隷屬に最も重きを置いてゐるのに、教授は隷屬と貧窮とを同列に置いてゐる。「吾々の除かざる可からざる近代社會の根本的弊害は何ぞや」と問はるゝときにギルド・マンは「隷屬」と答へるのに教授は「隷屬と貧窮」と答へ

るであらう。こゝがギルド・マンと教授の社會問題に對する觀方の相異である。

然し教授はギルド・ソシヤリズム運動に對して積極的の賛同をしないまでも其の「消極的の merit」を認めてゐる。英國勞働者が産業國有に満足せず、生産者專制のサンヂカリズムに危懼の念を抱くとすれば、彼等はギルド・ソシヤリズムに向ふより外はないのである。教授はこのことを稱して「消極的の merit」と云ふのである。(二三二—二三三頁)この英國勞働の立場はまた教授の立場ではないかと私は密かに思ふものである。

「マルクスの價值論と價格論との關係」はマルクスが其の「資本論」第一卷において商品の價值は其の生産に必要な社會的勞働時間によつて決定せられるとしながら、第三卷において「資本的生產方法の發達した所では商品の價值は所

謂生産價格(費用價格に平均利潤を加へたもの)によつて定まる」(三六四頁)とした兩者の主張の矛盾を指摘した Karl Diehl の Ueber das Verhältnis von Wert und Preis im ökonomischen System von K. Marx を紹介し、併せて教授の「マルクス價值、價格論批評を論述したものである。佛蘭西二月革命の一節を語つた「勞働權の承認と國民工場の始末」、英國第十九世紀初期の所謂リカルド派社會主義者たる「トオマス・ホジスキンの勞働果實全收權主張」並びに現時の大問題たる戦費についての理論的考察を行ひたる「戦費の經濟理論」と共にすべて興味あり、且つ有益な論文である。

以上の如き内容を有する「社會問題研究」は社會問題の學徒が觀過すべからざる著作であると思ふ。私は斯くの如き良書の出版を喜び、之を江湖に紹介すると共に徒に長き紹介、批評の筆

を執りて讀者を煩はしたることと著者に對して  
自評を加へたる罪とを深く著者と讀者に對して  
謝するものである。(加田忠臣)

本庄榮治郎氏著 經濟史研究

菊版五九四頁定價四圓五十錢  
京都弘文堂書房發行

我國法制史の老大家としては穂積(陳重)有賀  
(長雄)等の諸先生を始めとして、既に學界に多  
大の貢獻を爲したる者、其人に乏しからず、殊  
に最近此の方面の研究に没頭して、前人未到の  
域に馳騁する者は東には中田薫君あり、西には  
三浦周行君あり、共に偉大の精力家として、年  
々歳々頻りにその研究の結果を發表せらるゝを  
見る、蓋又盛なりと云ふべし。

然るに我か經濟史の研究に至りては、其の先  
驅者なる福田河上兩君は今や全く其の方面を變

しては往年余が在西のとき親しく君に對して議  
論を上下したることありしも、君には自ら君の  
所信あり、斷然その初説を執つて動かざりしは、  
當時余の頗ふる敬服したる所である、昔し水戸  
の碩學栗山潜峰保建大記を著はし、神器の所在  
を以て帝位の正偽を証するの説を唱ふるや、同  
僚三宅觀瀾その説の不當を鳴らし、常に相互に  
論争して共にその主張を枉げざりしが「君子は  
和して同せず」の金言を守つて、觀瀾と潜峰と  
は其の交友の情誼、愈々益々親厚にして、終生  
兄弟も及ばざるが如くなりしは、學界の美談と  
する所なるが、余の本庄君に於ける又實に斯く  
の如き思を爲さずんばあらず、況んや君は我が  
經濟史上最も至難とする新方面に向つて大膽に  
開拓の犁鋤を進め、以て此の一大著作を完成せ  
らるゝ迄に許多の好資料を収集せられたるに至  
つては、其の説の異同に拘はらず誰れか君の努

へて他の領土に移り、始終孤壘を守つて苦節を  
改めざりし内田銀藏君は不幸にして、昨年既に  
白玉樓中の人となられ、我國經濟史界の傳燈、  
其れ將た消滅に歸せんとする所の折柄、圖ら  
ずも新進有爲の本庄榮治郎君西方の一隅に現は  
れ出て、既に卓然と斯界に獨壇の地歩を占むる  
に至りしは、所謂空谷の足音にして、我か經濟  
史研究者の爲め大に人意を強ふするに足るもの  
なきにあらず、乃ち彼等が君の著作の發表に囑  
望すること、大旱の雲霓に於けるが如くなるは  
固より偶然にあらざるのである。

然れども今回新たに刊行せられたる「經濟史  
研究」は必ずしも嶄新の學説を説きなるものに  
あらず、又必ずしも卓拔の意見を述べたるもの  
にあらず、其の學説に就て之を批評し、其の意  
見を取つて品隲すれば余の意に満たざる所二三  
に止らざるのである、現に書中の或る問題に關

力の偉なるに驚かざる者あらんや。

本書十篇は如上努力の結果に成れるもの、篇  
々皆悉く有益の記事にして、何れも學界を裨補  
すること鮮少にあらざるべきも、殊に君の最も  
得意とする所は恐らくは第四篇徳川時代の米問  
題と第十篇西陣研究との二篇なるべし、後者は  
君の先著「西陣研究」の補稿と見るべきものにし  
て(自序に依る)前書の拾遺に過ぎざるが如くな  
るも、其の實此の一篇だけでも、他人に望むべ  
からざる大著作にして、此特種の問題を研究す  
るには前書と併せて欠く可らざる永久的の價値  
を有するものである、前者即ち米の問題は君が  
今日尙ほ熱心に調査を遂げつゝあるの問題にし  
て、何れ近き將來に於て更らに又何等かの題目  
の下に、その結果を發表せらるべきも、而かも  
此の問題は君が豫ねて最も深く研究し居らるゝ  
所なれば、本書第四篇は特に精讀に値ひするも